

資料6

環境リーダー・ビジョンワーキンググループ 活動報告

第3回あきたスマートシティ・プロジェクト推進協議会

場所:秋田市正庁

平成23年8月2日(火)

1 本ワーキングの目的と今年度の活動内容

目的

- あきたスマートシティ・プロジェクトをアジア・アフリカ地域の環境リーダー育成の場として位置づけ、東北大学大学院環境科学研究科が実施する「環境リーダー育成プログラム」の履修者を本プロジェクトの実施に参加させる。
- あきたスマートシティ・プロジェクトのビジョン検討を継続して行い、秋田らしいスマートシティ実現を目指す。

活動内容

- 環境リーダー育成プログラムとの具体的な連携方策および受け入れ体制の検討。
- 「秋田らしさ」の分析とスマートシティへの反映方法の検討。

2 ワーキンググループにおける検討内容

環境リーダーの育成

- 環境リーダー育成プログラムとの連携については、同プログラムの実施責任者である東北大学大学院環境科学研究科長 田路(とうじ)教授にも協力を仰ぎつつ、来年度からの履修カリキュラムに、あきたスマートシティとの連携を加える。
- 実施内容については今年12月を目処に検討する。

ビジョンの検討

- かつて秋田市および周辺市町村で営まれていた生活様式を調査することで、「秋田らしさ」の分析を行うことを検討。
- 具体的には、90歳以上の高齢者に昔(主に戦前)の生活を聞き取り、共通する事項、キーワード等を抽出する。
- また、戦前の暮らしは(諸事情の制約があるとはいえ)「省エネルギー型」の生活でもあり、秋田版スマートシティに現代の生活に合わせた形で反映できるものについても検討する。
- 東北大学大学院環境科学研究科を中心に、宮城県において先行実施している。

3 90歳ヒアリング ～宮城県での事例～

目的

- 90歳の人々は1945年に25歳、1960年に40歳。エネルギー使用量が現在の2分の1の時代。彼らが知る持続可能で低環境負荷な暮らしのかたちが急速に失われている。
- 90歳は、自然との共生の暮らし方の宝庫である。
- 過去の知恵を現代に活かすとともに、「地域らしさ」を学ぶ。

実施方法

- ヒアリング対象者 宮城県在住90歳程度の高齢者60名
- 地域 仙台市、山間部、農村部の3地域
- 期間 2010年1～3月

4 90歳ヒアリング ～宮城県でのヒアリング事例～

<90歳のことば>

屋敷はイグネで囲まれていて出入り自由。涼み台のようなところに子どもがいっぱい集まって、上級生から教わるんですよ。「あそこの家のボタンキョは、こっちから行くと採りやすい」ってね。実際、暗くなるまで遊んでいて、月明かりの下、いっしょにいて教わるんです。向かいに「あっこじんつあん」とよんでた家があったんですが、柿、クリ、ばたんきよ、梅、成りものの木がいっぱいある大きな百姓家でね、見つかると「これ！また来たかー！」と追っかけてくる。あの顔は忘れられませんね(笑)。その家は裕福な家なんですけど、あっこじんつあんは、道に落ちてる馬ふん、縄をひろって歩くんです。集めて、堆肥にするためなんですよ。

<現代に活かす昔の知恵>

イグネというこの地域独特の自給自足の文化が存在した。

自宅の周辺、コミュニティの中心に、生活に必要なものを備えることによって、災害対策、地域コミュニティの強化が実現できる。

例えば、地域ごとに、人々が集う場をつくり、そこで充電機能も持たせる。住民が管理する個所も設置し、町内会で管理するなど工夫する。



4 90歳ヒアリング ～宮城県でのヒアリング事例～

<90歳のことば>

魚はおばさんが背負いかごをしょって、閑上から売りに来た。近海の生きのいいカレイがあった。シビの刺身は父親がさばいた。魚売りのおばさんは、回る家が決まっていて、家には日曜日にしか来ない。うちは日曜日しか両親がいないからね。

魚屋さん、下駄屋さんのほかにも行商が多かったね。伊達の方から小間物屋さんが、行季(こうり)を重ねて背負って来たので、大人はクリームとか髪留めとかを買ったりしていました。お正月には万歳が、赤い着物着て鼓をたんがいて来るのね。もう1人は袋担いで、お米もらって歩くの。1升もあげると喜んでいました。子どもたちはぞろぞろついて歩いてね「あそこで米をいっぺあげたからうんと踊っていった。あその家ではいっぺあげねから少し踊っていった」なんて言っていました。

<現代に活かす昔の知恵>

仙台商人の特徴に「出前商売」がある。これからの高齢社会には、各家を回る商売形態も見直されるべきである。

エネルギーの供給も「出前」で行うことも考えられる。また、この御用聞きは、自然エネルギー機器のメンテナンスも可能となる。